

「箸の先」

三重言友会 田中 美紀(旧姓 谷口)

皆さん、こんな話をご存知ですか？

『ある男の人が地獄と極楽へ見学に行きました。始めに、その人が地獄へ見学に行くと、なんと意外な事に山海の珍味が所狭しと並べられておりました。ところが、そのテーブルの前に座っている地獄の住人たちは皆ガリガリに痩せ細り、飢えて苦しんでおりました。

「はて、あんなにご馳走が沢山あるのにどうして飢えて苦しんでいるのだろうか？」とその人が思ってよくよく見てみると、彼らは手に手に2mも3mもあるような長〜い箸を持って食事をしております。その2mも3mもある箸で食べ物をつまんで口に入れようとするのですが、食べ物があっちの方へ行ってしまうて食べる事が出来ません。それで飢えて苦しんでいたのです。

男の人はそれを見て、「いやあ、食べ物が目の前にあるのに食べられなくて苦しむとは、地獄というのはやっぱり恐ろしい所だ」と思い、次に極楽へ見学に行きました。

すると、やはり極楽のテーブルの上には、これは予想通り山海の珍味が所狭しと並べられておりました。そして、そのテーブルの周りに座っている極楽の住人達は、皆、恰幅が良く楽しそうに笑いながら食事をしていました。やっぱり極楽はいいな〜と思って様子を見ておりましたが、なんと驚いた事に極楽の住人達も、手に手に2mも3mもある長〜い箸を持って食事をしているではありませんか！

地獄と極楽は何から何まで条件が同じです。はて？おかしいな、どうして極楽の人達は幸せなのだろうかと思議に思ったその人がよくよく見てみると、極楽の住人達は、長い箸で食べ物をつまむと自分で食べようとするのではなく、向かいの人に食べさせてあげていたのです。「はい、どうぞ、おいしいですよ」てな具合に。

すると食べさせてもらった人も自分だけ食べさせてもらっては悪いですから、「あなたこそ、どうぞ」と言って、また向かいの人に食べさせてあげる。つまり食べさせ合いっこをしていたんですね。

それを見て、男の人は「ははあ、地獄へ行く人と極楽へ行く人はこの心掛けが違うんだな」と感心して帰って来たとのことです。』

私にとって、この話は衝撃的でした。そんな長い箸でしか食べられないなんて、地獄ってなんて所だろう、と思っていたら、極楽でも全く同じ箸で食事をしている。私だったら、長い箸しかない事を恨めしく思い、それでもなんとか食べようと一生懸命になっているんじゃないかと自分の姿を想像してしまったので、極楽でのこの様子はショックでした。

明らかに私は地獄の住人だと思います。地獄と極楽は、その人自身が作り出しているんだ、と知りました。どんな条件、状況であってもそれを恨む事なんて出来ないんだと思いました。

皆さんは、どちらの住人ですか？

「箸の先 パート2」

天国の住人は、目の前にあるご馳走を箸でつまんで相手に差し出し、相手からも同じようにご馳走をもらっていました。ならば、吃音者は目の前にある「何」を相手に差し出し、同じような「何」を相手からもらうんだろう・・・と。差し出すものはやっぱり相手にとってもすごく喜ぶようなものがないんだ、と思うのです。ご馳走のように。そうすると、相手からも同じような喜ばしい事が返ってくる。

一体、吃音者は何を差し出せばいいんだろう・・・と考えた時、私の頭に浮かんだのは、「自分（吃音を含む）」なのではないかと思いました。例えば、「どもってすみません、迷惑かけてすみません」な自分を相手に差し出したら、相手から、同じようななんだか申し訳ない気持ちが返ってくるかもしれません。

「最後までちゃんと話を聞いてくれよ（怒）！」な自分だったら、相手からも「最後までちゃんと話せよ（怒）！」とかの「怒」の気持ちを受け取るのかもしれない。

相手に与えたものがそっくりそのまま自分に返ってくるんだったら「どもっても幸せな自分」を差し出してみたらどうだろう？そしたら相手からどもっても幸せなあなた、というどもりを受け入れた幸せな気持ちが返ってくるんじゃないかな、と。

自分が吃音に対して、悲しんでいたり憎んでいたり怒っていたり嘆いていたりしていたら、そっくりそのまま相手から吃音に対しマイナスなものが返ってくる。という事は、自分が吃音を受け入れ、楽しんでいたとしたら相手からも吃音を受け入れた楽しい（暖かい）気持ちが返ってくるのかもしれない。

自分から差し出すもの、これを変えれば、もしかしたら天国への道は、すごくすごく近いものになるのかもしれない。「自分の与えたものが自分に返ってくる」という言葉はよく言われている言葉だし、「昨日と他人は変えられないが、自分と明日は変えられる」という言葉もあります。「周りを変えたいなら、まず自分が変わることだ」という言葉もあります。もしかして、一番のポイントは「自分」かもしれない、と思います。

この世の人々が全て天国の住人のような吃音を受け入れてくれる人になるのを待っていてはきっと私たち個人の人生が終わってしまうと思います。それよりも一番早いのは、自分が天国の住人になってしまうことだと思います。

ふと思出すのは、五体不満足を書いた乙武くんの事です。彼は生まれながらに重い障害を背負っていましたが、その障害が彼を不幸にしたことはなかった、と言っていたと思います。普通、手も足もない体で生まれてきたら、その姿を人に見せる（知られる）のはとても恥ずかしいと思ってしまうものだと思います。でも、彼は、生まれながらの目立ちたがり屋の精神で人からジロジロ見られるのが嬉しかった人だと思います。普通、障害をもった人をジロジロ見るのはよくない、と言われているかもしれないけど、彼の場合はそれが通用しない。ジロジロ見て欲しかった、んですから。

彼について、可哀想に・・・と思う人は少ないんじゃないかと思います。もちろん、そう思う人もいるとは思いますが、私は乙武くんみたいな人になりたいと思うし、その生き方から多くの事を学びました。

彼は、天国の住人だろうと思います。自分の状況を恨む事なく、受け止め方ひとつで天国のような幸せを手に入れている人だと思います。でも、周りが天国のような住人だったからというよりは、乙武くんが天国の住人だったから、周りの見方が変わったんだと思います。彼が、「障害があっても幸せな（それを自分と認めている）自分」というのを周りの人に差し出しているから、周りもなんだか嬉しくなって「障害を認めて受け入れている自分」を彼に与えている。彼が与えているものが、彼に返ってきているように思います。

箸の先の話は、ある男が天国と地獄のそれぞれの世界を見学に行った話でした。でも、本当は、あのテーブルの前に座っていた天国の住人の両隣には、地獄の住人が座っていたんだと思います。天国も地獄の住人も一緒にいるのがこの世（現実）なんだと思います。

そして、天国の住人が地獄の住人にご馳走の箸を差し出す事で地獄の住人はこんな食べ方（見方）もあったのか、と気づき、天国の住人のような心になっていくのかもしれない。

私たちが、吃音の捉え方を変え、ご馳走のような吃音を相手に差し出していくことで、いつかみんながご馳走のような吃音を食べてくれる（受け入れてくれる）んじゃないかと思いました。

まず自分が天国の住人になること。

吃音を美味しいご馳走にしなければ誰も好んで食べてくれないと思います。吃音を誰も食べた事のないような美味しいご馳走にしていきたいと思いました。

吃音を好きになること。吃音を持った自分を丸ごと好きになること。相手（周り）よりもまず自分が変わること。そして、ご馳走のような自分（+吃音）を人に差し出していきたいと思いました。今はこれが、私の課題です。